

平成 25 年 10 月 17 日

# 東松島復興推進員だより（第17号）

～地を往きて走らず～

## ■インターン生による地域復興推進員へのインタビュー 四倉推進員編

JICA 東北支部でのインターンシップで、復興支援の取り組みを中心に学んでおります安藤紗和です。インターンシップを通じて、取材を行った JICA が宮城県東松島市へ派遣している地域復興推進員の取り組みを紹介させていただきます。

被災者の方々の復興まちづくりを支援するため、JICA では 2011 年 8 月から、震災復興モデル事業として、宮城県東松島市に地域復興推進員を派遣しています。2013 年 8 月には、地域復興推進員が赴任してから 2 年の節目を迎えました。赴任してからこれまでどのような思いで活動されてきたのか、今後どのように活動する予定なのか、地域復興推進員にインタビューを行いました。

JICA の地域復興推進員は、青年海外協力隊の経験や地元の人脈を生かして地域のニーズをくみ取り、コミュニティ再生を支えている方々です。東松島市で地域復興推進員として活動しているのは、東松島市宮戸地区で活動している四倉禎一郎さんと、野蒜地区で活動している佐々木潤さんの、お二人です。

今回は、宮戸地区で活動されている四倉推進員をご紹介します。

四倉推進員は、震災前、石巻駅の北側でクリーニング店を営んでいましたが店舗が被災しました。この店舗は、海から遠く離れたところに建っていたので、ここまで津波は来ないだろうと思い、避難をしなかったとおっしゃっていました。しかし、実際は、店舗は 1 m 以上浸水し、その上なかなか水が引かなかったため、社屋の 2 階の事務所に閉じ込められ、何も飲むことも食べることもできないまま 3 日間過ごされたそうです。震災後、会社の再建も考えましたが二重ローンの問題などがあり、会社の再建を断念しました。

そのようなときに地域復興推進員の募集を発見し、以前から青年海外協力隊に興味があったこともあり、地域の復興に貢献しようと推進員に応募したのがきっかけで活動をされています。

また、四倉推進員は、震災前は、自営業者として石巻青年会議所でも活動をされており、平成5年から12年からほどは石巻青年会議所で中心市街地のまちづくりに携わった経験を有していましたが、地域復興推進員としての活動の拠点である漁村のまちづくりには、全く違うアプローチが必要だったとお話していました。

私は、推進員の活動にはまちづくりに携わった経験が活かせるように思えたのですが、地域の特色によってアプローチ方法が多種多様であることを改めて学びました。

また、推進員のお二人は、青年海外協力隊の経験や地元の人脈を生かして活動をされているのですが、それぞれの経験を活かしている場合もあれば、そうでもない場合もあることも知ることができました。



海外からの研修員へ講義を行う四倉推進員



研修員を伴い島内の被災状況の視察を実施

#### <地域復興推進員の活動と役割>

推進員の目的は早期復興を目指し、住民主体のまちづくりを行政と住民、他の関係者と協力し実現することです。活動内容といえば、住民の意見や抱えている課題、そして行政との連携の中から日々見つけ出しています。

四倉推進員は、活動当初は東松島市の8か所の市民センターを訪問してヒアリングを行い、被害状況が激しかった宮戸地区を活動場所に決めました。宮戸市民センターも被災し津波で流失したため、奥松島縄文村歴史資料館に移転し、そこで支援物資の運搬や被災者支援に携わっていました。

その後、島内を車で回って探索したり親しくなった人に聞いたりして宮戸について調査を行いました。そして、生業再開の支援の一環として、月浜の海苔養殖グループの生業再建のサポートとして、一口オーナー制度の導入を支援したり、ホームページ作成やSNSによる情報発信に携わったりもしました。

このように住民の課題を見つけ出し活動されている四倉推進員に、推進員の

役割についてどのように考えているのか伺いました。

四倉推進員は、推進員の役割は、若者や女性など声の小さい人たちの声を聞いたり、行政と市民の間を繋いだりすることであるとおっしゃっていました。活動をしている中での問題点としては、復興がスムーズに進むようにサポートしなくてはならないが、住民のニーズを正確に掴むことが難しいため、あまりできていない点を挙げていました。

宮戸地区以外での活動として、文部科学省の事業である復興大学石巻センターのコーディネーターとしても活動をしており、コーディネーターの活動を通して、被災企業とその企業活動に関する分野を研究している大学を結んだり、復興大学を通じた支援の申し出を石巻市や東松島市に繋ぐ活動を行ったりしており、石巻市、東松島市関係なく、つながりを大切にしながら、手の届く範囲でつないでいらっしゃいます。



大高森から見た奥松島

四倉推進員が推進員の役割として挙げていた、住民の方の意見の吸い上げについて、住民の方々の意見や考えを協議会以外ではどのように把握しているのか伺いました。

まず、住民の方の意見の吸い上げのために、どのように既存のコミュニティに入って行ったのでしょうか。漁業集落は市街地と比較するととても閉鎖的で

あって、外部支援者は入りにくいと考えがちです。四倉推進員は、宮戸の4つの集落の内、たまたま初めに訪れたのが月浜であり、民宿経営をしていた住民が多かったため、外部者に対して開放的であったとお話していました。復興期にどのようなまちづくりを行うべきかを話し合う島全体の協議会ではきれいな提言しか出てこないため、より具体的な提言が出てくる各浜での会議というものが重要視されています。しかし、浜の会議は閉鎖的であるため、なかなか参加できない現状も同時にあります。

そのような状態でも、浜のコミュニティは重要です。浜の会議の問題点として、四倉推進員は以下の2つを挙げていました。

1つ目は、家長(世帯主)しか参加できないため高齢の住民の方が多く、且つ各家庭内で、会議内容が共有されにくいことです。高齢者しか参加しないことについての問題点としては、長期的な視点で復興を考えられないことです。なぜなら、高齢者は仮設からいち早く出ることを最優先に考えてしまうので、市の計画に異論があったとしても声をあげなかったり、将来のまちづくりに消極的だったりするためです。

2つ目は、若者や女性も参加して長期的な計画を立てなくてはならないと助言していますが、外部支援者が強制できるわけではないため難しいことです。若者とは飲みに行き話話を聞いたりしていますが、まちづくりになかなか取り入れられなかったり、市には伝えているのですが、協議会では伝えられなかったりするという現状があります。



各浜の会議の様子



各浜の会議の様子

#### <地域復興推進員の思い>

推進員の活動に対する思いについて伺いました。

四倉推進員は、活動を通して嬉しかったこととして、グループで行っている海苔養殖の後押しがうまくいったこと、イベントなどを通して地域の仲間に入ることができたことを挙げていました。一方、つらかったこととしては、地域復興推進員としてどのような活動をすべきかを見つけることが難しかったこと、外部支援者であるため地域の人々との関係作りに時間がかかったこと、今まで前例がないため何もかも新たに作り出さなくてはならなかったことを挙げていました。

最後に四倉推進員は、今後も、「活動をしている地域が少しでも良くなってほしいし、若者が戻って来て、長く続くコミュニティが形成されたらと思っています。」とお話していました。

今回は野蒜地区で活動している佐々木推進員をご紹介します。

JICA 東北支部 インターンシップ 東北大学 安藤 紗和

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

\*\*\*\*\*

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋がります。

\*\*\*\*\*